

『親を生きる』を支える

～児童発達支援センターにおける親支援の実践～



弘済学園児童発達支援センター「すきっぷ」
児童発達支援管理責任者 堀 由美

Ⅰ「すきっぷ」の療育について

2016年5月開所

単独通園クラス（毎日通園、10名定員の集団療育×2クラス）

- ・担任との信頼関係をベースに、
- ・無理なく十分に楽しめるプログラムを提供し、
- ・子ども同士が互いに意識し合い・学び合い・高め合う力の育みを期待する

2019年5月開設

親子通園クラス（毎日通園を基本に親子で通園、1クラス）

- ・親子間の信頼関係が築けるように、
- ・前向きな気持ちで子育てしていけるように、
- ・親子に焦点を当てて支援する

- 入所支援の視点～子どもの育ち・発達を、生活丸ごとで見る



通所支援でも生活・能力の一部分でなく、子ども丸ごと見る

- 入所支援の強み～子どものライフステージごとの育ちを知る



幼児期は「人としての育ちの土台」であることを知る



ここに、早期療育・早期介入の肝がある と捉える

すきっぷの早期療育の核は、
「構造化支援」と「心育て」

『構造化支援』：生活に見通しを保障するための合理的配慮

生活が構造化されることでの「安心感」



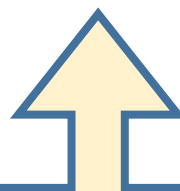
安心が子どもの「分り方（認知）」を支え、その発達を促す



分かり方に応じた「対人関係」を意図して注ぐ



対人関係が深まる過程にも構造化が働き、健やかな関係性の発達へ



このプロセスの深まりに『心育て』がある

『心育て』：「認知・情緒・意欲」の育ち



赤ちゃんは、
自ら学ぶ存在



幼児は、人から
教えられることで
学ぶ存在

幼児期は、他者との
「共有・共感」が欠かせない

大人と一緒に実体験することを通して
「共有・共感」を注ぐ

『からだ』にアプローチする遊びを通して
意図的に働きかける

『からだ』にアプローチ



粗大運動
【跳ぶ・跳ねる】

- ・自分の身体を使い、
主体的に物事に関わる
- ・自分の身体を理解し、
周りの「世界」を知る

👉 認知・社会性の土台



粗大運動をひろげる
【リボン遊び】

- ・集団で活動することで
基礎的なルールを学ぶ



大人と遊びを共有する中で、

認められ・褒められ・励まされ

意欲、自信、根気強さといった【心の育ち】がある

「すきっぷ」の親支援



障害があろうともなかろうとも、
我が子の生きようとしている姿を
しっかりと受け止め

その子育てに
じっくりと関わることが大切だ

ということに気付けるように
親を支援していくことを大切にしてきた。

～親支援の実際を一部ご紹介～

例①：登園時、降園時の伝達を、省略・簡素化しない

親とのつながりをより密に持つことを意図して、日々の伝達や対話、連絡帳のやり取りに加え、「何でもノート（いつ、何を記入しても良いノートで、各家庭に配布）」を活用し、園での具体的な様子やエピソードを一方的に伝達するのではなく、活動で見られた姿への見立てや読み解き、そこから気づかされた子どもの内面等を、親と職員とで共有し合うことを優先している。

例②：親教室（親向け勉強会）に発達の見点を取り入れ、内容を工夫している

それまでの親教室では、生活リズムやADLといった生活に係るテーマや、「自閉症について」「知的障害とは」といった障害に関するテーマを設定し、それについて学んでいく進め方を取ってきたが、障害についての学び方を見直した。具体的には、乳幼児期の発達課題について、領域間のつながりや連関を意識でいるような内容に変えていった。

☞ 我が子を「障害」の側面から見のではなく、日常の姿から発達や障害の状態に気付いていけるような進め方に工夫し、一般的な子どもの育ちや発達のプロセスを学んでいくことで、職員との伝達や対話の中で触れられる我が子の姿がそこから離れていることや、実はその姿こそが我が子の困り感や特性であることに気づいてもらうことを意図している。

Ⅱ ある一人の母親とこれまでの歩みを振りかえる

Aさん（3年間の療育を受けた男児の母）



- 入園する前のことについて
 - 入園した当初の思いについて
 - 食事や排泄面、親子関係など～辿ってきたプロセスを思い返して
 - 親としての自分について
 - これからの子育ての中で、大事にしていきたいこと
-
- 日々の伝達について
 - 親実習について
 - 親教室について
-
- 3年間を振りかえって思うこと

三つの柱で
2時間弱の聞き取り

※聴き取った内容については、資料Aをご覧ください

III Aさんの言葉から得られた気付き

入園前

- ・「他の子との違い」「違和感が拭えなかった」
- ・「（入園は）障害があると認められてしまうこと」

入園直後

- ・「奇跡が起こるかも」「治って普通学級に行けるかも」
- ・「子どもを変えてもらえるという思いがあった」

入園後

- ・「思っていたよりも、手強い子だったんだ」
- ・「奇跡を信じて入園したのに、奇跡は起こらず」

- ・「追いついてほしい」「できて欲しい」
- ・「どうしてできないの？」

- ・「本当に小さなことからちょっとずつ変化」
- ・（変化に対して）「その歩みにももどかしさを感じていた」

- ・「変化のきっかけは、我が子の変化」「でも、認め切れない」
- ・「我が子に合う接し方を少しずつ考える」

- ・「やってみて、私自身の成功体験があったから」
- ・「反応の変化に親としての手ごたえを実感」

Aさんへの支援や後押し



「療育に何のデメリットがあるの？」

日々の伝達で
ありのままの姿の共有

子どもへの発達支援

構造化をベースにしつつ、
安心・認知・関係・身体へのアプローチ
大人からの承認＋主体的な活動→心育ちへと

我が子と担任の
関係の変化

小さな変化
我が子の変化

担任との濃密な
話し合い

聴き取りを通して・・・



この言葉は、Aさんが

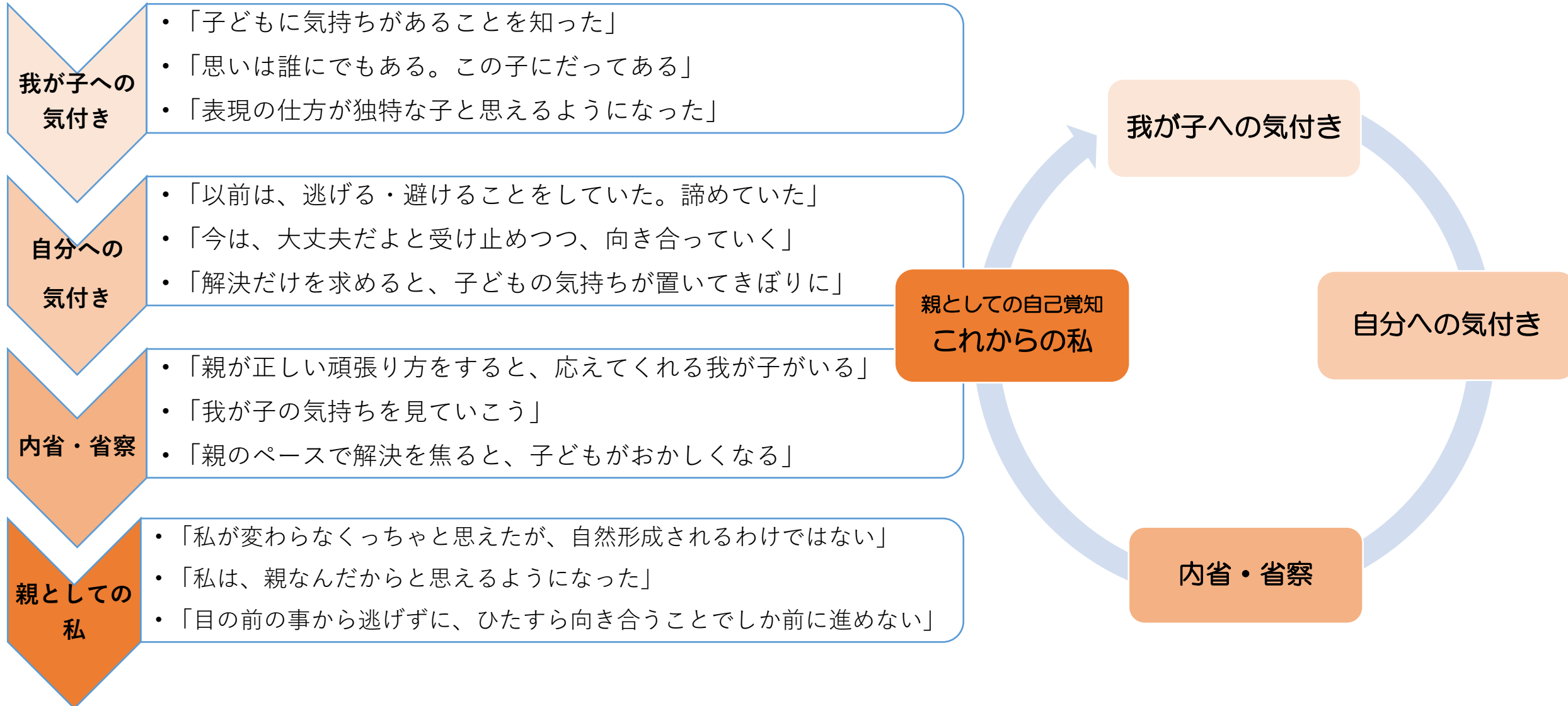
**「我が子の特性（障害）を受け止め、
親として向き合うに至るプロセス」**

になっているように見える

それと同時に、「語る、振り返る」ことを通して

**Aさん自身が、自分の変化を
俯瞰していったように思える**

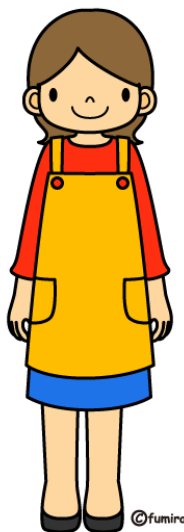
改めて、Aさんの言葉を見ると・・・



ここには『我が子理解へのプロセス』があるように見える

『我が子を受け止め、親として向き合うに至ったプロセス』

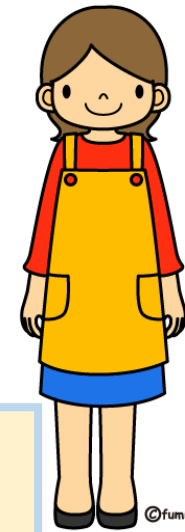
支援や後押しを通して
「相手との対話」があった



親育て

『我が子理解へのプロセス』

「自分との対話」があった



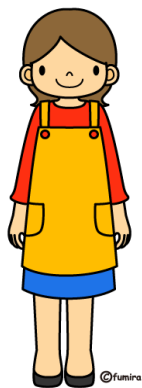
親育ち

「親が、親として、親を生きる」

入り口に立つまでのプロセス

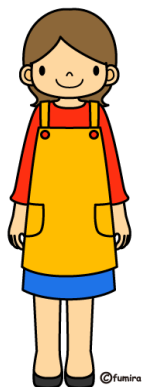
IV Aさんの言葉から、親支援について改めて考える

* 日々の伝達について



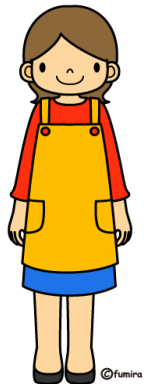
伝達は大事だった。伝達の中で、相談することで前を向けてきた。療育は、子どもが5時間過ごすだけの場ではなく、私が成長するきっかけになったのが伝達だったと思う。これがなかったら、親として成長できなかった。

* 見学について



見学の際、子どもの様子を見ながら実例を挙げて説明してもらったり、やっていることや取り組んでいる活動の意味を説明してもらえたことが大きかった。何気なくやっていること全てに意味があったことには驚いた。

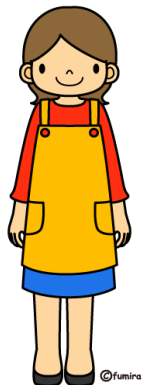
* 親実習について



一年目の実習では、できていないことに目線がいくばかりだった。二年目では、担任がどんな声掛けをしているのか、できていない時や困っている時に、うちの子はどんな表情をしているのか等に気付こうとする自分がいた。三年目では自分の目が変わったことを実感した。担任の対応にどんな意味があるのか考えて見学するようになった。

実習後の振り返りや実習ノートのやり取りも大事だった。担任からの説明や見方に納得もした。

* 親教室（親向け勉強会）について



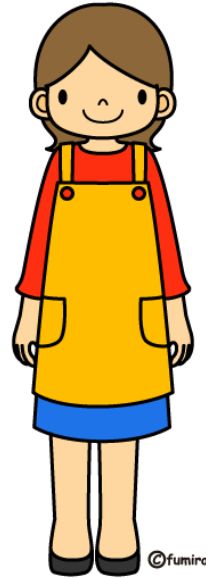
勉強する中で、受け入れられるようになってきた面もある。障害を受け入れることの一つにもなったのが親教室だった。

病院で「あなたのお子さんは〇〇です」と診断をもらうよりも、少しずつ知る中で「ああ、うちの子は〇〇なんだ」と受け止めていくことが出来た。

Aさんの歩みを振り返ると



日々の伝達や、見学や実習、親教室といった『場』を通して、親だからこそ
の焦り・落ち込みを経験してきた



でも、それだけではなく

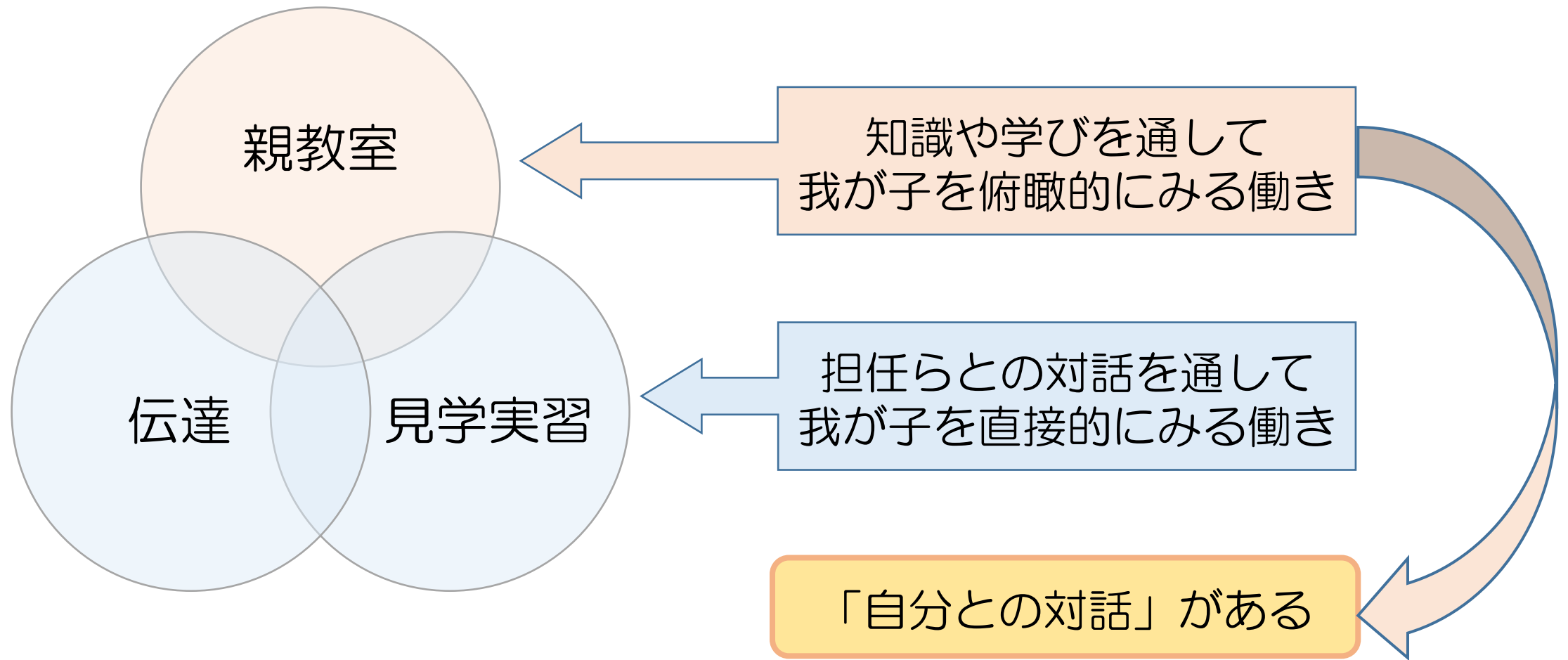


担任と共に我が子に向き合うことの
先にあったのは、
親としての喜びや自信、
豊かさや深みであった

Aさんの3年間は「『我が子と向き合うこと』に向き合ってきた」3年間と言える。

👉これは、Aさんが【自分自身と向き合う】3年間だったとも言える。

親への支援はどうあればいいのか？《その中身・内容が問われる》



親と気持ちや思いを共有し、
親が、我が子の【行動の背景にある本当の気持ち】に気付けるように！

👉 【親子関係を作る道のり】にこそ、親支援がある



子どもを 知ることの大切さ

